

第3回かのや未来デザイン会議

日時	令和5年2月16日（木）10時00分から11時55分
場所	市役所7階 大会議室
出席者	<p>◆出席12人（敬称略、五十音順） 片野田拓洋、金久博昭、上高原貴子、清藤修、隈崎和代、志賀玲子、白石秀逸、坪水徳郎、宮下昭廣、丸野里美、別府込初男、和田滋</p> <p>◆欠席3人（伊藤ふさ、小林千鶴、山之内眞由美）</p>

■主な質疑等

発言者	内容
	<p>【協議】</p> <p><u>(1) 重点プロジェクト（案）について</u></p> <p><u>①働きたくなる・住みたくなるプロジェクト</u></p>
委員 事務局	<p>○ 情報発信について、具体的な対象は想定しているか。 ⇒ 市外にいる本市出身者で30～40代を考えている。いずれ帰ってきたいと思ってもらえればよい。市出身者以外でも、本市に関心のある人、縁のある人にも意見をいただければと考えている。</p>
委員	○ どういった形で鹿屋の魅力を売り込むのが課題である。メディアを上手く活用するなどプロの知恵を借りて、戦略的な情報発信、展開が大事である。
委員 事務局	<p>○ 全体的に若者がキーワードになっている。若者はデジタルに慣れており、面白い発想を持っている。若者のスタッフを取り込むような考えも必要。 ⇒ 情報発信媒体も色々あるため、それらの機能や特徴、使い方なども周知しながら、若者の取り込みを検討していきたいと考えている。</p>
委員 事務局	<p>○ 全体を通して、主な取組は来年度実施するものや継続して取り組むものなど、実施時期が決定しているか。 ⇒ 本ビジョンは10年の計画であり、継続して取り組むもの、来年度実施するもの、数年かけて実施を検討していくものなど、方向性を示しているものである。</p>
委員 事務局	<p>○ 地域おこし協力隊は現状いないのか。 ⇒ 4名いる。行政のPR関係の業務を担っている。</p>
委員 事務局	<p>○ 全国の地域おこし協力隊は、どちらかと言えば重点プロジェクト3や4の取組を担っている方が多い。事業承継となると新しく良い取組だと思う。 ⇒ 大崎町が既に取り組んでいる。</p>
	<p><u>②みんなで育む「かのやっ子」プロジェクト</u></p>
委員	○ 子どもが生まれてからの支援はよく聞くため、その前段階での支援は良い取組だと思う。「まち婚」や「アウトドア婚活」など、違った切り口での婚活イベントも良い考えである。
委員	○ キャリア教育やキャリアプランニングは学校（教育現場）で考えないと上手く

事務局 委員	<p>いかない。市がやる場合は、高校と連携するのか。</p> <p>⇒ 市内6校と相談しながらになるが、年間2校くらいとできればと考えている。</p> <p>○ コロナ禍で出生数も1割以上減っている。一時的ではなく呼び水として定着させるためには、企業誘致で来た人などに、子どもと暮らしやすいまちだと思ってもらうための発信が必要である。移住者が孤独にならないように、田舎暮らしに憧れて移ってきた人が定着するために適用と定着を考えていかないといけない。重点プロジェクト2が重点プロジェクト1を支えるのだと思う。</p>
委員	<p>○ インフルエンサーは影響力がある。鹿屋市にも情報を発信する人がたくさんいるが、発信し続ける人が少ない。</p>
委員	<p>○ 関係・交流人口から鹿屋に住む、その人たちが定着するとしたとき、その次に文化振興がある。文化が足りない（スポーツも含め）。一過性じゃなく定着させなければいけない。</p>
委員	<p>○ 発信し続けることがターゲットを広げる。こういった会などで集まった人たちが発信し続けることも大事である。</p>
委員	<p>○ 「ヒメとヒコ」では（主宰者は）収入度外視で取り組んでいる。大人がどれだけ子どもたちを応援できるかが一番大事。一人ひとりの子どもをみんなで育てていかないといけない。大人が変わらないといけない。</p>
委員	<p>○ 地域に開かれた教育課程が求められている。主権者教育も授業の中でやっているが、公共の学びとして課題探求で題材をいただくと取組やすい。これまで中学生へのアピールから小学生への学習支援に変わってきているため、早い段階からのつながりを大事にしてほしい。</p>
委員	<p>○ 男性も出産前の大変さを体験できる機会があり、（体験者からは）もっと早く知りたかったという感想もある。</p>
委員	<p>○ 鹿児島県は進学する若い女性など、出て行く率が上がっている。若い女性をどう取り込むかが核になる。</p>
事務局	<p>○ 子育てに対する新たな経済的支援は具体的な考えがあるか。</p> <p>⇒ 児童手当は中学生までであり、高校生への支援がないため「高校生応援給付金」の支給を考えている。また給食費への支援について考えている。</p>
事務局	<p>○ 財源は何を考えているか。</p> <p>⇒ 最終調整中ではあるが、ふるさと納税を充てる予定である。ただし、ふるさと納税も安定・恒久財源ではないため、使い方など精査していく必要がある。</p> <p>○ 都城市は「3つの無償化」と魅力的な言葉を出している。鹿屋市もキャッチフレーズがあれば良い。都城市とは人口もそこまで変わらなかったはずだが、工業団地ができ、市街地に図書館ができ賑わいが生まれている。近くに良い例がある。交通インフラが整うと吸い取られかねない。都城市から引っ張ってくることも考えるべき。</p> <p>⇒ 都城市はふるさと納税が150億くらいある。東京のいたるところで「ふるさと納税日本一 都城」という看板等見る。財源の確保がなければ施策の展開は難しい。「稼ぐ力」とは自主財源をいかに高めるかということであり、稼いだ資</p>

<p>委員 事務局 委員</p>	<p>金を地域内で循環させることが大事である。良いところは真似をしていきたい。</p> <p>○ 高校生応援給付金の対象は。市内在住者だけか。</p> <p>⇒ 「高校生」とあるが、扶養されている16歳から18歳の子どもが対象である。</p> <p>○ 経済的負担が大きいために市外の高校に出せなかった世帯が、この給付金で市外にチャレンジできるようになるのではと少し不安がある。</p>
<p>事務局</p>	<p>⇒ 色々な選択肢があって良いと考える。今回は高校生は中学生以上にお金がかかり、支援が中学生までしかないため、手当とするものである。また、大学進学のための奨学金についても、返済が大変と聞かため、制度設計はこれから考えていくが、条件付きで返還を免除するような奨学金制度も設ける。</p>
<p>委員</p>	<p>○ 「結婚しなくて子どももないから好きなことができる」という声がある。結婚して子どもを産んでも、大きなことができる、活躍できるまちという表現もあれば良いと思う。</p>
<p>委員</p>	<p><u>③未来につながる地域づくりプロジェクト</u></p> <p>○ 高隈・吾平と好事例がある。一方で、必ずしも自分たちだけではできない部分もある。何をやったらいいかわからない、何から始めればいいかわからない地域を行政がサポートすることも大事である。また、地域同士のネットワークづくりを行政がサポートすることも必要である。</p>
<p>事務局</p>	<p>⇒ 地域づくりは、人口が減っても住み続けられるというセーフティネットでもある。10年後20年後は相当変わり、限界集落の高齢化率も7割くらいになると思われる。自助、共助に加えて行政のやるべきことを明確にしていかなければいけない。そのために総合支所の役割も明確にし、地域に寄り添った体制を構築していこうと考えている。地域の変化に合わせた対応が必要となる。</p>
<p>委員</p>	<p>○ 高齢者にとっては、行政がバックグラウンドにいてくれることが安心材料になる。民間の個人でやっていくことは難しく続けていくことの大変さがあるため、官民一体で取り組んでいかなければいけないと考える。</p>
<p>委員</p>	<p>○ トヨタカローラが志布志市で病院と連携して独居老人の足となるプロジェクトをトライアルで始めている。産業界も上手く取り込んでほしい。</p>
<p>事務局</p>	<p>⇒ 色々な事業者の話を聞きながら検討していきたい。また、現在町内会長への聴き取りも行っており、どういったところに手を差し伸べるのが良いか検討している。支援の仕組みづくり挑戦してくプロジェクトである。</p>
<p>委員</p>	<p>○ 10年20年先のビジョンだと思う。大隅4市5町の連携は欠かせない。鹿屋が中心なのは当然であるが、鹿屋だけでは繁栄できない。4市5町の連携を常に念頭に置いて施策を展開してほしい。</p>
<p>事務局</p>	<p>⇒ 本冊(案)35ページに広域連携を記載している。住む人にとって、市町の境はないため、大事なことだと認識している。また、次ページに国への提言を記載している。人口減少対策は一自治体、一圏域ではできないところもあるため、国が大きな絵を描いて枠組みづくりすることを求めるものである。</p>

	<p><u>④かのやしビックプライドプロジェクト</u></p>
委員	○ スポーツがキーワードになっている。鹿屋市と体育大学の連携の現状は、ブルーウィンズ事業はコロナ禍で打撃を受けたが、昨年くらいから対面で実施できるようになった。キーとなる人を増やそうと努力している。
委員	○ 健康・体づくり、スポーツで地域活性化することを考え、1月からスポーツ推進イノベーションとしてスポーツとヘルスプロモーションを行っている。スポーツ合宿も一つの大きなセクションと位置付けている。アフター・ウィズコロナに向けて戦闘態勢は整っている。
委員	○ 垂水から鹿屋の新しいバイパスができれば、グラウンドやキャンパスを一望でき、大学を見ながら通勤できる。大学を身近なものにし、スポーツで地域を元気にしていきたい。
委員	○ ばら園はリニューアル中であり、発信の仕方も考えている。地元の若者が、市外に出たとき「ばらのまちで育った」「ばらのまちから来た」と言ってもらえるような、子どもたち向けの園づくりもしていきたい。
委員	○ 「ヒメとヒコ」では、出演者の高校生が、最後に「何もなしのまちだけど、いろんな事を体験させてもらって、大好きなまち」と言葉にしている。文化は人・子どもを育てる。みんなで温かく見守ってほしい。
委員	○ スポーツツーリズムの「する・観る・支える」は平仮名表記だと思うので確認してほしい。
	<p><u>(2) その他</u></p>
委員	○ 資料には転勤による転入者が多いとあるが、転入者に対するプラン（取組）はないのか。
事務局	⇒ 転勤による転入者が多いのは鹿屋の特徴である。知り合いがいない人なども多い。鹿屋で良い思い出をつくってもらうために、農の原風景に触れてもらう、豊かさを実感してもらえるような取組を考えていきたい。
委員	○ 良い条件が付きすぎると、近隣市町から移ってくる。(大隅で考えると)人口が増えるわけではなく人口が集中するだけなので、しっかりと連携しながら人口を減らさない、増やす取組を展開してほしい。
委員	○ ビジョンの位置付け・計画期間に具体的なアクションプランがあった方が、年度毎の施策の検証もしやすく、実効性が高くなると思う。
事務局	⇒ 予算編成作業も踏まえて、今後の3～5年くらいに何をするのか整理して進捗管理をしていきたい。